

自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(美術)／山木
朝彦

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

1)授業内容:学部・大学院ともに、教育実践とくに、専門である教科教育の実践的な内容に焦点を絞り、実践と理論の有機関係を図る。また、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成と知的好奇心の向上、現場での児童生徒・同僚・保護者との良好な人間関係を構築するための説明力やディスカッションに必要な言語能力を養うことをすべての授業での共通の内容とする。

2)授業方法:学部・大学院のすべての授業において、プレゼンの機会・討論の機会・小集団での課題解決の機会を織り込む。また、グローバル社会と多元文化社会という二つの相が昂進する現代社会を見据える教員を養成するために、ICT活用・有用な各種映像アーカイブ(美術と教育関連のDVDなど)の活用を行う。加えて、21世紀の教員に求められる英語活用能力の促進のため、意識的に英語の文献の紹介と解説も行う。

3)成績評価:評価の透明性と客観性を図るため、これまで以上に、オリエンテーション時における成績評価方法の説明に力を入れる。上記1)と2)に照らして、論理的思考力・主体的な学習および研究の成果・リーダーシップの発揮などの点に十分留意して、評価を行う。

2. 点検・評価

1)【授業内容】教師に求められる基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成を図り、その成果が現れたと判断できる。また、「学び続ける教員像」という理想を念頭に、永続的な自己刷新の基本となる知的好奇心の喚起に努め、その成果が全体的に向上した「授業評価アンケート」に現れた。さらに、説明力やディスカッションに必要な言語能力を養うことを学部・大学院のすべての授業で実践した。

2)【授業方法】ICT活用・美術と教育関連のDVDの活用を行い、そのメリットを活かした授業方法改善を行った。また、学部・大学院のすべての授業において、プレゼン・討論・小集団での課題解決の機会を織り込んだ。さらに、英語活用能力の促進のため、意識的に英語の文献を読ませた。この成果は、「初等中等教育実践基礎演習」という授業に象徴的に現れ、学内の「教科教育研究委員会」(代表:伊東治巳)で2013年10月28日に単独で発表を行い、複数の委員がその授業方法に賛同をしてくれた。これは大きな成果だと言える。

3)【成績評価】成績評価の透明性と客観性を図るために、前後期の授業の全てにおいてオリエンテーション時における成績評価方法の説明に力を入れた。論理的思考力と主体的な学習および研究の成果・リーダーシップの発揮など多角的な観点から、適正に評価を行った。具体的には、「図画工作科教育論」の評価において、授業内容の整理だけではなく、自発的に発展的な知識の獲得を促し、教育事典や美術用語事典での語句調べによる語彙の充実や発展的なテーマについての記述が提出した学習用ノートにあるかどうかを確認し、論理的思考力を伴う主体的な学習が進んでいるかどうかを厳密に評価した。このような取り組みは成績評価の適正化に相応しいものであると言える。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

・就職支援室との連携を深め、各県の教員採用試験に出た過去問や教員採用と関連の深い教育雑誌などの情報を集め、これからの教師に求められる教育や美術の基礎的な事項を精選し、講義中に意識的に取り上げるとともに、小テストなどを積極的に行い、日々の学習と就職への支援を関係づけていく。これは、学部の授業と大学院の授業で実施する。

・研究面での大学院生と学部生との交流が捗るよう支援する。具体的には、修論執筆の過程で、大学院生に進捗程度の発表をさせ、そこに学部学生を参加させて、質疑応答を行う。学部学生についても同様に自らの研究等を発表させ、院生との質疑応答の機会を持たせる。

・学部生が集う専修室には、こちらから出向き、教員採用試験対策などについて話を向け、勉学の悩みなどがあればすすんで聴くようにする。

・同様に院生研究室にも毎日、必ず訪れ、研究を促すよう心掛ける。

・学部生・大学院生などを積極的に美術館と学校との連携のプロジェクトにかかわらせるよう努力する。

・インターネットの情報収集の方法や利用のためのリテラシーについて機会あるごとに教える。また、これからの教員として必要な教育機器の利用の仕方やパワーポイントの作成の仕方、著作権の基礎的な知識などを授業中に獲得できるように努め、全体としてICTに強い教員の養成に努める。

2. 点検・評価

・就職支援室において各県の教員採用試験に出た過去問をコピーして、講義中にその要点を取り上げるとともに、小テストなどを積極的に行い、日々の学習と就職への支援を関係づけた。

・2014年1月29日に「徳島県立近代美術館」に隣接する「21世紀館ミニシアター」にて開催した「卒業論文の成果発表」と「修士論文の成果発表」に向けて、研究発表面でも、発表者相互の刺激と学び会いを促し、結果として大学院生と学部生との交流が捗った。

・学部生が集う専修室には、こちらから出向き、教員採用試験対策などについて話を向け、勉学の悩みなどがあればすすんで聴いた。

・同様に院生研究室にも毎日、必ず訪れ、研究を促すよう心掛けていく。とくに中国からの留学生である院生の進路相談や進学準備については、何度となく進学希望先の連合博士課程岡山大学研究室まで足を運び、情報の収集に努め、適切な指導に繋げた。

・授業中にN-Cap(大塚国際美術館関連)の話を取り上げ、積極的に美術館と学校との連携のプロジェクトにかかわらせるよう努めた。

・授業中、実際に検索サイトにアクセスし、インターネットでの情報収集の方法や利用の仕方を学生に示した。同時に、著作権や有害情報排除の方策も教え、ネット利用のためのリテラシーについて機会あるごとに教えた。また、いわゆるコピーの問題点や著作権の基礎的な知識などを授業中に教え、全体としてICTに強い教員の養成に努めた。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

・昨年度に助成期間は終了した科研(基盤研究(C))「英国テイト・ギャラリーの教育普及活動における学校連携の方法と成果」と、同じく科研(挑戦的萌芽研究)の「ビジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)を援用した新しい日本語教育の試み」の両者について、研究の進展と成果報告書の発行の結果、次の研究主題の創出までのあいだに纏めておくべき新たな課題が自覚された。そのため、本年度は、両者にかかわる論文執筆と発表ができるよう、努めることとする。

・英国の美術教育の理論と実践について、文献を収集し、これらの耽読と解題・整理を行う。これについては、とくに発表の機会を考へてはいるが、適宜、成果が出てきた段階で、発表などを検討する。

2. 点検・評価

科研(基盤研究(C))「英国テイト・ギャラリーの教育普及活動における学校連携の方法と成果」(期間は前年度まで)に関連する論文を執筆し、本学の学内紀要に「英国テイト・ギャラリーの美術教育への貢献-バーバル・アイズの事例研究を通して見えてくるもの」という論題で投稿し、掲載された。また、英国の美術教育の理論と実践について、ハーバート・リードの功績を軸に文献を収集し、これらの耽読と解題・整理の成果を第36回美術科教育学会奈良大会にて、「教育思潮・芸術思潮としての『芸術による教育』-成立の思想的背景を探る試み」として、宮脇 理氏とともに共同研究発表を行った。年度当初は学会発表までは考えていなかったが、現在、美術科教育学会での発表ができたことが良かったと思う。同様に、年度当初には予想していなかった原稿依頼がフィルムアート社から舞い込み、『現代アートの本当の学び方』(フィルムアート編集部編)という書籍に、最新の批評理論などを盛り込み、「どうしたら批評眼ができるか」等、2箇所について執筆できたのも研究成果の1つである。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

・教育研究評議会評議員として、大学運営の根幹に関わる審議事項について、将来的な見通しについて慎重に照らし合わせながら、建設的な発言に努めたい。

・学術研究推進委員会委員として、大学の研究・教育の向上に関する事柄について、今まで以上に積極的に発言と提言を行う。

・附属図書館運営委員会委員(副委員長)として、前年度から始まった書評関係の企画である「私の本棚から」が順調に軌道に乗るよう力を尽くしたい。

・大学機関別認証評価委員(グループ・リーダー)として、本学の現況について客観的かつ正確な分析に努めたい。

・コース内の若手教員との良好な関係を構築し、大学の教育・研究面の改善への提言を上記委員会へ反映するように努める。

2. 点検・評価

・教育研究評議会評議員として、大学運営の根幹に関わる審議事項について、将来的な見通しについて慎重に照らし合わせながら、建設的な発言に努めた。

・上記と関連するが、いわゆる部会副部長として、芸術・健康系教育部会議において教育研究評議会の決定事項の正確な伝達と、部会の議事進行のサポートに努めた。

・学術研究推進委員会委員として、大学の研究・教育の向上に関する事柄について、他者の紀要投稿論文などの校閲など適正に仕事を行った。

・附属図書館運営委員会委員として、前年度から始まった書評関係の企画である「私の本棚から」が順調に軌道に乗るよう力を尽くした。

・大学機関別認証評価委員(グループ・リーダー)として、本学の現況について客観的かつ正確な分析に努めた。

・コース内の若手教員との良好な関係を構築し、大学の教育・研究面の改善への提言を上記委員会へ反映するように努めた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

a. 附属学校との連携

・附属幼稚園, 附属小学校・附属中学校の園児・児童生徒が地域の美術館を利用し, 実りある鑑賞学習ができるよう, 各学
校園および美術館と緊密な連絡を取り合い, 教育内容が充実するよう, ギャラリートークなどの授業計画作成に協力する。
・附属中学校・附属小学校との連携を強化し, 教材開発と研究促進に積極的にかかわる。

b. 社会との連携

美術科教育学会の副代表理事(学会事業部担当)として, 美術教育研究の質の向上に努めたい。また, 「せとうち美術館
ネットワーク」や大塚国際美術館との「地域文化財教育活用プロジェクト」を積極的に推し進めることで, 地域の教育力を高
め, 子どもたちや市民の美術館来館による美術・芸術の活性化と, 美術教育理論の社会への応用を図りたい。

c. 国際交流

今年度, 中国からの大学院生として留学生を受け入れ, 論文の主たる指導教員となっている。この留学生に対して懇切丁寧な指導を行なうことで, わずかながらではあるが国際交流の活性化に努めたい。また, 授業中に日本人の学生と留学生との交流が促進するよう努めたい。

2. 点検・評価

a. 附属学校との連携

附属小学校の児童生徒が地域の美術館を利用し, 実りある鑑賞学習ができるよう, 徳島県立近代美術館と緊密な連絡を
取り合い, 当館にてギャラリートークを7月9日に実施した。
・附属中学校・附属小学校との連携を強化し, 教材開発と研究促進に積極的にかかわった。

b. 社会との連携

美術科教育学会の副代表理事(学会事業部担当)として, 学会地区会の開催に向けて, その枠組み美術教育研究の質の
向上に努めた。とくに, 美術科教育学会理事の奥村高明氏(聖徳大学), 谷口幹也氏(九州女子大学)が企画した「ヒトに
とって〈美術-教育〉とは? - 根源的思索と実践的思索を架橋する -」(2014年3月2日CCAAアートプラザ(東京都新宿区
四谷))を成功させるため側面から支援した。

また, 岡本哲雄氏(教育哲学専攻・関西学院大学)・有元典文氏(教育心理学専攻・横浜国立大学)・辻政博氏(美術教育専
攻・帝京大学)をシンポジストとして迎えたこのシンポジウムの司会を行った。

また, 「せとうち美術館ネットワーク」の第5回「せとうち美術館サミット」に付随する「特別講演」の企画を行い, 倉敷市立美術
館講堂にて, 世田谷美術館主任学芸員の塚田美紀氏と, 大分市美術館長の菅 章氏をお招きして, 学術的な研究発表をし
て頂いた。また, 大塚国際美術館との「地域文化財教育活用プロジェクト」を積極的に推し進めることで, 地域の教育力を高
めた。

c. 国際交流

指導している中国人留学生に対して, 国際的な文化交流の契機となるよう, 水墨画教育にかかわる論文の指導に努めた。
この過程で, 日中それぞれの教員に両国の教育制度および教育方法について情報を流通させるよう, 指導学生に促した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

--